## 3-4｜風水界の現在地──研究なき世界と、自腹の限界

風水が「信じる・信じない」の世界に追いやられてしまった理由は、いったい誰にあるのでしょうか。

風水師の誇張のせいでしょうか。それとも、スピリチュアルブームの副作用でしょうか。

確かに、そうした要因もあるかもしれません。しかし、より根本的な原因が存在していると感じています。

それは──風水には“まったくお金が落ちてこない”という現実です。

たとえば、医学には莫大な国家予算が投じられています。がん研究、遺伝子治療、AI診断──これらには数百億円単位の国費が投入されています。

建築の世界でも、ゼネコンは国家プロジェクトに関わり、大学には構造・環境・都市計画の専門研究室があり、国土交通省とも連携しています。

科学技術分野においても、気象・宇宙・量子・環境など、あらゆる分野に公的資金が流れ、共同研究や社会実用化のための補助金や助成金制度が整っています。

では、風水業界には、そういったお金の支援はあるのでしょうか。

答えは、ゼロです。

風水には研究費も補助金も制度もなく、民間企業の支援もなく、大学に風水学部があるわけでもなければ、国家資格も存在しません。すべては、個人の裁量と自己資金によって行われています。風水師は皆、自腹で古典を読み、現地を歩き、試行錯誤を重ねています。それにもかかわらず、社会からは「なんとなく怪しい」「胡散臭い」といった印象で片づけられてしまいます。

ここには、構造的な不平等が存在しています。

正当に研究されていない分野が、軽視されるのは当然の結果とも言えます。

しかし、それは風水の中身の問題ではなく、研究の“前提条件”が整っていないだけではないでしょうか。もし仮に、量子研究者や医師たちが、すべてを自腹でまかない、書籍のみで臨床を続けなければならないとしたら──その分野は十年と持たずに廃れることでしょう。

風水は、そのような過酷な状況下で今日まで生き延びてきたのです。そういったことで言えば、細々と生き長らえることができたという点においては、不遇ながらも風水の真実を追求し、伝えてくれた先人の風水師たちに、私たちは感謝せねばならないと思うのです。

このような環境下に置かれている風水の世界──研究費がなく、制度もなく、社会からの理解も薄いという状況は、確かに不当とも言えます。

しかし、それを嘆くだけでは何も始まりません。冷静に振り返ってみれば、風水界自身にも「変わるための努力」が足りなかったという側面もあるかもしれません。

たとえば、風水には国家資格制度が存在していません。建築士や医師のように、法制度の中で責任と技術を保証する枠組みが、風水には用意されていないのです。多くの風水師は、個人の学習と経験、そして師弟関係の中で技術を培ってきました。体系的な教育機関や、国家認定の研究機関もなく、大学に風水を専門とする講座があるわけでもありません。

つまり、「制度化される努力」もまた、なされてこなかったのです。

学術の世界において、風水が取り上げられることもありますが、それはごく一部に限られており、多くの研究者は「風水」という言葉を避け、「環境心理学」「都市気候学」「空間認知」といった枠組みに置き換えられています。

一方、風水界に目を向けてみると、理論の継承は続けられているものの、冷静で客観的な検証やデータの蓄積といった“科学的な問い直し”は、ほとんど行われてきませんでした。もし蓄積したとしても、個人レベルのデータにしか過ぎず、風水業界がまとまってデータを取っているわけでもありません。

「先人がこう言った」「古書にこう書いてある」──それらは確かに大切な礎です。

しかし、現代という時代とどう向き合い、どうすれば社会に伝わりやすい形に昇華できるのか。

その問いを風水界全体が真剣に受け止めてきたとは、言いがたい状況にあります。

風水界は、不遇でした。同時に、閉ざされてもいました。

外部からの評価を求めつつも、内部では変革を起こしてこなかった──

それが、風水が“社会の外側”に追いやられてしまった、もうひとつの理由なのです。

風水はこれまで、“非科学的”という理由で退けられてきました。

「再現性がない」「数値化できない」「測定できない」──そのように指摘され、科学的とは言えないとされてきました。確かに、現時点の科学技術では、風水の「氣」を直接計測する手段は存在しません。しかし、それは“存在しない”のではなく、“まだ測れない”だけなのではないか──そう考える時期に、私たちは来ていると思います。

第２章４節でも「科学の視点から氣を捉える可能性」について触れましたが、ここでも改めて、その接点を探ってみたいと思います。

近年、物理学や生物学の分野では、「見えない情報」や「場のエネルギー」が新たな研究対象として扱われ始めています。たとえば量子力学では、粒子は確率波として存在し、観測されることで初めて実体を持つとされています。つまり、“観測されていない状態”では、世界は常に揺らいでおり、固定された物質というよりも“エネルギーの分布”として存在しているのです。

また、生体電磁場や脳波、場の共鳴といった現象が、人間の行動や感情に影響を与える可能性があることも示唆されています。音や光、波動の違いが心身の状態に変化をもたらすことは、音響医学や波動療法の分野で徐々に明らかになりつつあります。

さらに「空間のエネルギー環境が、人間の判断・行動・ストレスに影響を与える」といった実験データも、環境心理学などで報告されています。

これらは、風水が古来から語ってきた「氣」という概念と、驚くほどよく似ています。

たとえば風水では、「門（玄関）・房（寝室）・灶（台所）」の配置や方位が氣の巡りを左右し、「旺氣」のある空間では人が明るく前向きになるとされてきました。

これを科学的に言い換えれば、採光や温熱環境、視線の抜け、音の反射、匂いの滞留、風通し、電磁波の強度など、複数の物理的・感覚的パラメータが絶妙に組み合わされた“空間の情報場”の質と言えるのです。

つまり、風水が「氣」と呼んできたものは、単なる迷信でも霊的現象でもなく、未分化で複合的な“空間のエネルギー総体”としての“場の質”を直感的に読み解いていた可能性があるのです。これを科学的に裏付けるには、さらなる研究と技術の進歩が必要です。

しかし、風水が長年向き合ってきた“氣の違い”が、いつか科学の言葉で語られる日が来る──その夜明け前に、私たちは立っているのかもしれません。

たとえば、吉の氣に満ちた空間と、凶の氣が漂う空間とでは、そこに存在する粒子・波動・情報構造に何らかの違いがある可能性もあるでしょう。これを環境科学や量子生物学の視点から比較研究することができれば、風水の核心が、「再現可能な空間データ」として立ち現れてくる可能性があります。

「吉方位に入ったときの脳波」「凶方位に寝たときの自律神経変化」など、身体レベルの変化と氣の流れを結びつける研究こそが、風水の科学化への第一歩になることでしょう。